⑥　新しい時代の日本論・日本人論　その２　『人間を幸福にしない日本というシステム』

現在においては，どのような日本人論・日本論が「主流」となっているだろうか。

1)　現在の日本の国際的立場

1990年代＝世紀末の日本は，国際的にはどのような立場にあるか。

> **いまさかんに「第二の敗戦」という言葉が言われている。この言葉にはいくつかちがった解釈があるが、ふつうはつぎのような意味で使われている。太平洋戦争でアメリカ（正しくは連合国軍であるが）に負け、アメリカに占領され支配をうけ、アメリカの指示に従って日本が復興したというのが第一の敗戦である。そして、日本が独立し、奇跡的ともいわれた経済成長を遂げ、アメリカとの経済戦争に勝ったょうにみえたが、バブル経済の崩壊とそれにつづく不況にともなって、「グローバル・スタンダード」などの主張のもとにふたたびアメリカの支配をうけるようになった、これをふつう第二の敗戦と言っている。　　マークス寿子『とんでもない母親と情けない男の国日本』**

ヴォーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が書かれ注目を浴びた1970年代末から1980年代へかけては，あたかも日本が経済的に世界を支配することになるかもしれないと思われていた。

しかし，1990年代初頭に起こった〔1　バブルの崩壊　〕の崩壊とその後の長期不況によって日本の地位は低下。対照的にアメリカ経済が好景気を持続。

日本は「第２の敗戦」を迎えたといわれる。

★第２の敗戦とは何か。

1980年代の日本経済の発展→貿易摩擦によって諸外国の日本への要求が強まる。

この結果日本は，これまで日本が続けてきた独自の経済的規制（ルール）をやめ，アメリカの主張する〔2ユニバーサル･スタンダード〕＝（3世界標準　　）を受け入れ，〔4　規制緩和　　〕を行ってきた。

※ルールを緩め，アメリカの主張する経済活動の自由を受け入れざるを得なかった。

例　牛肉オレンジの輸入自由化

※この意味でこれは，第３の〔5　開国　〕とも言われる。

つまり，結果的に日本はアメリカの主張に従い，挙げ句の果てにアメリカ経済は発展し，日本経済は低迷している。

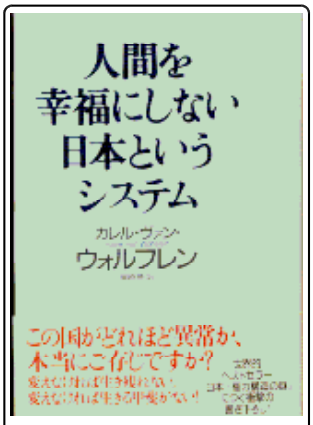
2)　1990年代の日本論の代表『人間を幸福にしない日本というシステム』**(1994年)**

1990年代になると，日本に対してかなり強硬に批判をする外国人が現れる。

その代表者が，〔6　カルヴァン・ウォルフレン　〕である。

※アメリカ・日本で活躍しているオランダ人のジャーナリスト

彼は，右掲の書や『なぜ日本人は日本を愛せないのか』など数冊の著作を通して日本社会に対する鋭い考察を行った。



この刺激的題名が彼の強硬な姿勢を表す。

★ウォルフレンの主張する日本社会

日本社会は次のような根本的ゆがみを持っている。

(ｱ) 正確な〔7情報　〕が不足している。

(ｲ)　〔8　男性〕中心主義の社会

(ｳ) 政治が〔9　官僚〕によって動かされている。

(ｴ) 国民が〔10　あきらめ　　〕の心理を持っている。

日本人が完全に市民として行動するのは難しい。それは、市民として必要な知識の多くを奪われているからだ。日本という国が官僚と経済団体の役員たちによって実際にどのように運営されているか、その内幕は〔　a　〕という見せかけの奥に隠されている。日本の市民たちの明日の生活、さらにはその先々の生活にまで影響する最も重要な決定でも、通常は公に議論されることがない。「バブル経済」の発生と終息への大蔵省の関与は、その最も顕著な例だ。　日本の人たちは官僚からしばしば荒唐無稽のでたらめな話をきかされる。これは、官僚が面子を守りたいと思っていたり、正確な情報が世間に流れると実現のチャンスがまったくなくなるような計画を強行したいと思っていたりするからだ。

おまけに、日本のたいていの新聞は、新聞の第一の使命は市民に情報を提供することだなどとは思っていない。だから新聞は、「純朴」だが政治的には無知な日本人の層を存続させるのに手を貸している。メディアは、日本では、政治・経済・生活上の〔　a　〕という表向きのリアリティを「管理」するための、つゆ払いの役目を果たしている。

この管理されたリアリティは、われわれが努力すれば発見できる本当のリアリティと、たいへんちがっている。なるほど説明と実際の不一致は、すべての民主国家を含め、どの国にもある。しかし、私がここで指摘している日本のその落差は、他の先進工業国より、はるかに、はるかに大きいのだ。

日本の市民はたいてい、何かにつけ、このリアリティにはまり込んで動けなくなっていると感じている。表向きのリアリティが、管理されたつくりものに過ぎない、と時々は気づくが、結局はそれを受け入れざるをえない。なぜなら、周りの世界はすべてそれによって動いているからだ。日本人がこうした状況にはまり込んだ時、口をついて出るセリフが「　b　」である。

「　b　」というのは、ある政治的主張の表明だ。おそらくほとんどの日本の人はこんなふうに考えたことはないだろう。しかし、この言葉の使われ方には、確かに重大な政治的意味がある。「　b　」と言うたびに、あなたは、あなたが口にしている変革の試みは何であれすべて失敗に終わる、と言っている。つまりあなたは、変革をもたらそうとする試みはいっさい実を結ばないと考えたはうがいいと、他人に勧めている。「この状況は正しくない、しかし受け入れざるをえない」と思うたびに「　b　」と言う人は、政治的な無力感を社会に広めていることになる。本当は信じていないのに、信じたふりをしてあるルールに従わねばならない、という時、人はまさにこういう立場に立たされる。

「　b　」という言葉を知るずっと以前、私が日本に来てまだ数カ月のころ、日本人のおとなしさ（＝御しやすさ）には面くらったものだった。日本人は日常生活で必要以上の我慢を強いられているように見えた。ほかの先進国ではまず受け入れられるとは思えない生活条件を押しつけられていたからだ。

よく通った中間階級向けの食堂で、いつも出される食事のまずさと量の少なさには驚きっぱなしだった。喫茶店で、ソフトドリンクを一びん注文したつもりなのに、びんからはちょつぴり注いだだけで、はとんどは氷で埋まったグラスが出された時は、さすがに怒ったものだ。当時の外国人仲間で、それぞれが目撃した、ひどい扱いをされても何も文句を言わない日本人の驚くべき実例を、あれこれと話題にしたものである。私たちは、顔を合わせれば、日本人の「受け身で受け入れる」態度について語り合っていた。

後になって、この態度には自尊心がからんでいるとわかってきた。いちいち騒ぎ立てないのが大人の態度であり、私たち外国人のように文句ばかり言っているのは、子供じみていて自分勝手で、やっかい者の最たるものだと考えられているのが次第にわかってきた。成熟した大人の日本人なら、ひどい扱いもこれを許し、静かに耐えることによって、互いを安け入れ合うというわけだ。

日本には昔から、仕方がないと言えるようになれば成熟した証拠だとみなす伝統がある。そして確かに、これは日本だけの伝統ではない。西洋でも、いや世界中どこでも、自分の能力の限界の自覚が、もはや子供ではない証拠だ。しかし、重要なちがいもある。私と友人が初めて日本にきた当時、私たち外国人は、こんな詐欺まがいの商慣行を顧客として中止させる能力が自分たちにないなどと、どうしても容認できなかった。食堂や喫茶店のはかの客も私たちの抗議に加わってくれれば、イカサマ商売はやめさせられるというのが私たちの考え方だったのだ。

日本の市民の生活環境としては不幸なことに、徳川時代の全体主義的な政治体制が、今日もまだ幅を利かせているのである。日本が市民の国となるためには障害になるに決まっている生き方が、いまだに正しいとされている。

徳川時代なら、「　b　」や、それに類する当時使われた言い方は、とても理に適っていただろう。なにしろあの時代には、庶民は国のいたるところで、ひどい政治に耐えなければならなかった。

自分の人生をより自由に生きたいと思う市民は，「　b　」という一句を自分の辞書から追放した方がいい。しかし，そうするためには，まず勇気が必要だ。本書が励ましになってほしいと思う。

★〔a　　〕や「b　　」についての指摘は鋭い。

3　日本文化と外国文化との相違

①　日本文化と外国文化の相違

第１章の学習を終えるにあたって，最後に自分の意見をまとめてみよう。

★これまで第１章で学習してきた内容の中で，あなたが一番印象に残った「日本文化と外国文化の相違」または「日本文化の特色」は何か。また，それについて自分の意見・感想・そのような違いが生じる原因の分析等を書きなさい。

組	番	氏名

『俺たちのニッポン』（1999年小学館）筆者はエバレット・ブラウン。アメリカ人で日本在住ジャーナリスト。サッカー選手のドゥンガ，ロペス，横浜ベイスターズのローズなどの有名スポーツ選手の生き様や思いから，「日本とは何か」について考えるヒントを提供してくれる。

②　これからの学習へ

この章では外国人や日本人の著書から，日本文化と外国文化の相違について学んできた。この章を終わるにあたって，次のことを確認して，次章へのつなぎとしたい。

★これからの学習に結びつけること

(ｱ) 多くの外国人の著書に示されていたように，日本社会・日本人の行動・考えが外国人と異なることを認識すること。

(ｲ) そういう広い視野に立った上で，日本の優れた点・日本の文化のよさを確認すること。

(ｲ)の観点に立つ場合，次の文章（右の枠内に説明した『俺たちのニッポン』から引用）はなんらかの示唆を与えてくれる。

「あの写真は名古屋場所で撮ったものだよ。私には相撲取りの友達が何人かいて，名古屋に巡業に来た時には招待してくれるんだ。時間がある時は，できるだけ本場所の土俵を見にいくことにしている。日本の文化で興味を惹かれるものはたくさんあるけれど，相撲は格別だ。相撲はカだけの格闘技じやない。むしろ，熟練された集中力と精神力を競うものだ。相撲を初めて見た人は，相撲取りはただ筋肉の力を使って相手を土俵から押し出そうとしているだけだと思うだろう。でもやがて，勝つために相撲取りが用いる駆け引きや強い精袖力に気づかされるはずだ。相撲を見ることで，私は非常に重要な影響を受けたと思う」

ドゥンガがとくに注目したのは，横綱貴乃花だ。

「彼の集中力は並外れている。土俵に入る時，彼は自分の周りにいる観客など眼中にない。彼の意識は勝負に集中しているんだ。あの目は，とてつもなく強力な集中力を持つ者の目だよ。そして，そういう集中力を感じさせる日本の文化は，相撲だけじやない。アートの世界にもあるんだ。たとえば茶道における無駄のない動作や，深い内的バランスの感覚，こういったものから私はとても大きな影響を受けたんだ。実は日本に初めて来るよりずっと前から，私は日本の文化に興味をもっていたんだよ。サムライやカミカゼに関する本をたくさん読んだし，映画もたくさん見ていて，武士道精神というものに，深い感銘を受けていたんだ。ダイニングに行こう。君に見せたいものがあるんだ」

ダイニングルームは障子の窓のある十二畳の和室で，陶芸品が並び，床の間には木製の大きな箱が置かれていた。ドゥンガはその箱のところに行き，蓋を開けた。中にはサムライの鎧が入っていた。彼はそれを大切そうに取り出し，畳の上に置いた。鎧はみごとな状態に保たれていた。

「この鎧は，私がこういうものにすごく興味を持ってることを知っている日本人の友人からの贈り物なんだ。四百年くらい昔のものだと思うよ。陶芸も興味深いね。1984年にキリンカップで初めて日本に来て以来，私は日本の職人たちの技巧の粋に魅せられて，日本の陶器や磁器の収集を始めたんだ。その後，たまたま地元の名匠の一人のもとで陶芸を学ぶ機会があった。彼は素晴らしい感性を持った人で，その沈着さと謙虚さから，私は強い影響を受けたよ」

ドゥンガの日本文化に対する関心は，とても幅広い。

「三年前に日本に住み始めて以来，私は日本人のメンタリティーを知ろうと努力してきた。人々といろいろなことを話して，日本人の感覚を理解しょうと努力したんだ。日本と日本流の生活というものに深く入っていきたいと思ったからね。けれども，私が話をした多くの日本人は，私が禅や茶道や相撲などの日本の文化に興味を持っていることにびっくりするんだよ。そして，ブラジルへの興味を見せる日本人もほとんどいない。ブラジルには偉大なサッカーの伝統があるし，ほかにも文化的にユニークで面白い点はいっぱいあるのにね。どうしてだろう？　私が日本の文化に興味を持つのは，自分のブラジル人としてのメンタリティーを変えるためじやない。私がしたいのは，自分がお客として来ているこの国にできるだけ順応したい，ということだけなんだ。できるかぎり順応して，日本に住んでいるというこの機会を最大限に生かしたいんだ。意義深い経験こそが，人生をより豊かにしてくれるものだからね。これはどこに住んでも同じだよ。ブラジルでも，日本でも，ヨーロッパでもね」

では，実際に日本で暮らしてみての感想は？

「日本は多くの意味で，非常に閉鎖的だと感じるね。だが，いまや世界はすごいスピードで一つになろうとしているのだから，日本は他の国の人々に対してもっと心を開く必要があるだろうね。ただし，私が会う日本人のうち二，三割は，他の文化や人々に対して開放的だと思う。そういう人はたいがい外国に出かけて，豊かな経験をしているんだ。でも，私が話をしていて本当に面白いと思うのは日本の年配の人たちだね。私は彼らと禅，茶道，歌舞伎，相撲や日本人の自然に対する尊敬などについて話し，謙遜の精神や彼らが戦後経験してきた葛藤を学んだ。戦争によって荒廃したこの国を立て直した強い意志と深い知性を彼らは持っている」

来日後，ドゥンガの日本観，日本人観はかなり変わったようだ。

「日本に来る前は，みんながお互いに助け合い，共同体の調和という意識を持っているんだと思っていた。ところが，日本に来てから目にしたのは，誰もがみな自分のことだけをやっているという姿だった。まるで工場みたいだ。労働者は自分の仕事だけをし，まるで機械の歯車のように働いている。そして，まわりの人を助けようとは思いもしない。他人のことなど，まつたく眼中にないんだよ。

集中力についても同じことが言える。日本人は集団として高度に組織化されていて，大いなる集中力と内的バランスを持ち，共同で仕事をすることのできる人たちだと私は思っていた。しかし日本でサッカーをしてみて，この国の人々がすぐに集中力を失うということに気がついたんだ。とくに若者たちは，アメリカ人の真似ばかりして外見だけを気にしていると思う。アメリカ文化の悪い面を取り入れて，自分たちが受け縫いできた良い面、たとえば年配の日本人が持っていた集中力と精神力を，失ってしまったように感じる。日本人は自分たちの伝統を取り戻すべきだと思うね」